

「燈謎」をめぐる文人意識の変化 —— 謎話から得られる考察 ——

呉 修喆

はじめに

清末から民国にかけて、ブームとなって発展し、今もなお愛好家による活動によって生き続けている漢字文化の一つとして、漢字の形・音・義（意味）を利用し、文学的に書かれる「謎」というものがある。各時代において、こういった謎はさまざまな名称で呼ばれてきたが、現代中国において最も広く用いられるのは「燈謎」である。

1925年に出版された鈴木虎雄（1878-1963）の「支那文学に於ける語戯」⁽¹⁾に「燈謎」という一節があるが、そこに引用された史料の中に、「燈謎」ということばは直接に出ていない。すなわち、

呉自牧の夢梁録に、商謎者、先以鼓兒賀之、然後聚人猜謎といひ、周密の武林旧事に、絹燈に詩や詞や汴京の譚語を翦り写して行人を戲弄することあり、都城紀勝に、來客念隱語説謎、名打謎などゝあれば、燈謎は南北二宋以来の事と見えたり。⁽²⁾

とある。『夢梁録』、『武林旧事』および『都城紀勝』はどれも南宋の都であった臨安（現在の杭州）の風物を記録するものであり、南宋の時代には、前に置かれる動詞こそ「念ず」「説く」と異なるが、「隱語」と「謎」が通称として用いられていたことが知られる。

また、明代に書かれた「謎」に関する記述を見ると、劉侗・于奕正の『帝京景物略』には、

正月八日から十八日、人が東華門外に集まり、燈市と言う。詩で物を隠して寺や道観の壁に掛けるのがあって商燈と言う。⁽³⁾

とあり、田汝成の『西湖遊覽志余』巻二十「熙朝樂事」には、

正月十五日が上元節⁽⁴⁾であり、前後五夜に燈籠を掲げる。（中略）物好きは藏頭詩⁽⁵⁾などを書き、人に当てさせ、猜燈と言う。⁽⁶⁾

とあり、張岱の『陶庵夢憶』には、

街の交差点で木の棚を組み立て、大きな燈籠を掛け、俗には呆燈ほうとうと言う。上に四書や千家詩せんかしの故事或いは燈謎が書かれており、人はその周りに立ちながら謎当てをする。(中略) 概ね宋から謎を燈籠に貼って元宵節を飾ることから影響を受け、元明以降は遂に風習となった。⁽⁷⁾

と書かれているように、元宵節などの祝祭日に燈籠の表面に謎を書き、それを当てる風習が根付いたことが窺える。こうした明代の記録から、この風習によって「謎」が「燈」と結び付けられ、或いは「燈」が「謎」の代名詞として使われるようになり、次第に「燈謎」という語が生まれたことが分かる。

清代になると、燈謎活動が楮人ちよじんかく撰けんこしゆう『堅瓠集』や梁章鉅撰『歸田瑣記』、梁紹壬撰『兩般秋雨盦隨筆』などの筆記作品の中に記録されているほか、専門的な「謎集」(謎の作品集)も多く出版された。その中には、費源の『玉荷隱語』のような個人による謎集もあれば、『竹西春社鈔』のような謎社⁽⁸⁾ 同人の作品集もあり、また『十五家妙契同岑集』のような書坊(出版社兼書店)が輯録した多数の作家による合同作品集もあった。それらの謎集に記載されている謎の多くは四書五経などの儒家經典、いわば科挙時代の文人であれば誰もが持っている伝統的教養を材料に創作されたものである。

やがて、清末・民国期になると、そのような文人の謎は、近代新聞雑誌の発達から全面的に影響を受け、一つの都市文化として需要と供給の両面において大きく成長した。そしてそれは、謎人(燈謎の製作者)の創作意識の変革を促すことにもなった。1872年に創刊された、中国で最も早い新聞の一つである上海の日刊紙『申報』には、その創刊の年から、既に謎に関する文章が掲載され始めている。例えば、「燈謎二十五則並引」には、

射覆せきふ、商燈しょうとうは文人の遊戯であるが、腹を探り合って智闘し、通常とは別の智慧を要するため、気軽にできることではない。故に古人は盛会の場において必ず燈謎を創って雅趣を得た。惜しいことに、申江(上海の別称)一帯は人材が雲集し、数多く巧みなる文学が書かれ、互いに美しさを競って目を奪わんとし、いかなる珍しいものも見られるというのに、ただ文虎ぶんこの事に関しては欠如している。恐らくそれが詩壇の諸君子にとって、取るに足りない小技だからであろう。⁽⁹⁾

という端書きが付いている。この一篇の記事には、タイトルの「燈謎」以外に、「射覆」「商燈」「文虎」⁽¹⁰⁾ という単語も出てくるが、どれも同じ「文人の遊戯」、すなわち「謎」を指している。また、翌年には「廋詞艷情四集」⁽¹¹⁾ という文章も『申報』に載せられた。その文中には、

廋詞隱語の由来は久しく、元より人の性靈を啓発し、人に考えさせるものである。し

かし、私が見た『申報』に載せられた四五十作以上ある謎は、すべて謎底（謎の答え）を解いて見せるものであり、古人の蔵鈎射覆の旨⁽¹²⁾に背いていないか。

との意見が述べられ、読者から解答を募集するという形式が提唱された。そういった流れに乗って、その後の『申報』には「隱語候教（燈謎の応答）」や街で開かれる「射虎会」の告知などが多々見られるようになり、ここに清末から始まる謎ブームの一斑を窺うことができる。

こういった「文人の遊戯」である謎を指すのに「燈謎」という名称が定着するようになったのは20世紀の80年代以降、比較的近年のことかもしれない。例えば、1986年に出版された陸滋源の『中華燈謎研究』には「燈謎と謎語の分岐」「燈謎と謎語の區別」を説明する節がある。陸はまず、謎を文義謎と事物謎の二種類⁽¹³⁾に大きく分け、そこから論を展開している。明代の謎集を読めば分かるように、もともと燈謎イベントにおいて用いられる謎には文義謎と事物謎の両方が含まれていた。しかし、清代以降、「燈謎」という言葉は徐々に文義謎に限定して用いられるようになったと陸は指摘する。一方、「謎語」という言葉も本来、文義謎と事物謎の両方を指すものであったが、現代においては専ら事物謎を指す語となっている。

『中華燈謎研究』の中では燈謎と謎語の區別をはっきりさせるために、具体例が出されている。例えば、答えが同じく「蚕」となる謎を、謎語にすれば「一個姑娘真可愛，不吃葷腥吃樹叶，成天勞動紡絲線，為了別人好穿戴（可愛い女の子、肉や魚は食わずに葉っぱを食べ、一日中働いて糸を紡ぐけれど、それは他の人が美しい服を作るため）」となるのに対し、燈謎のほうは「石頭老虎（虎の石像）」となる⁽¹⁴⁾。これは「石」という漢字の「頭」を取ると「一」という漢字が得られ、その「一」を「老虎」の別称である「大虫」と縦に組み合わせると「蚕」という漢字ができるため、「蚕」と解くのである。この例が示すように、燈謎と謎語の區別は単に文学的価値の有無というより、漢字の独特な性質を利用しているかどうかというところにこそある。その區別によって、燈謎は漢字文化に特有な謎として、世界中に見られる謎語と一線を画すのである。

ただ、そもそもなぜ燈謎と謎語を区別しなければならなかったのか、その過程を遡ってみれば、燈謎を一種の漢字文化として成り立たせる風潮は清末から民国期に書かれた多くの「謎話」によって創りだされたと考えられる。謎話とは、詩話、詞話などという詩、詞に関するエッセイ風の評論文と同じく、謎人の活動状況や燈謎作品に対する評価、燈謎の創作理論などを主な内容としており、清末・民国期の近代ジャーナリズムの発展とともに、謎話は様々な出版物に登場するようになった。それを通して、清末民国期の謎人がどのように活動を展開し、交流していたか、謎に対する理解がどのように変容してきたかを分析することが可能なため、中国における燈謎の歴史を研究するための重要な一次資料となっている。ただし、謎話それ自体を対象として、その社会的意義などを分析するような先行

研究は管見の限り見当たらない。

そこで本稿は、清末から中華民国期に新聞、雑誌等に発表されるようになった「謎話」を手がかりとして、この時期に事物謎から文義謎までを含む「謎」という雑多性のある大分類から「燈謎」という精練された概念が分離・析出されてくる過程をたどり、その過程と積極的に関わった人（燈謎の創作者と謎社のメンバー）に見られる意識の変化を、その過程を傍らから見る傍観者や、その対極に立つ中国民俗学の先駆者たちが持つ意識と比較しながら整理・分析する。なぜなら、その意識の変化は清末・民国期の中国文化が直面する新旧知識の取捨やエリート文化と通俗文化の対抗と融合、文人の社会的アイデンティティなど様々な問題をプリズムのように屈折／反射するからである。漢字文化の近代性にまつわるそれらの課題を掘り下げていくためには、これは重要な作業である。それによって、「燈謎」をめぐる文人意識が変化する時代的・文化的な背景と、燈謎の発展過程に生じる変化との関連性を明らかにしたい。

一 謎話の雛形

謎話の元になったと考えられる議論は、実際には清末より以前、既に謎集の前書きや章回小説などの中で芽を吹いていた。例えば、明代の嘉靖朝に書かれた李開先（1501-68）編の謎集『詩禪』の序文は、まず謎の別称である「詩禪」ということばの由来について、

人心が少し変わり、真っ直ぐな道を貫くことが困難となり、それによって託興（託けること、隠喩）、侷詩（言葉が通常と異なる詩）、諷諫（諷刺と諫言）、寓言、隱語、廋詞といったものが生まれた。それらを俗に謎と謂うが、士大夫はそれらを詩禪と呼ぶ。⁽¹⁵⁾

と解説している。恐らくこれが、謎の呼称が社会階層によって区別されることを書いた最初の文章ではないかと考えられる。ここでは、同じ文化事象を異なる名称で呼ぶことが、社会的アイデンティティの確立と関係する可能性を示唆している。ただこの時点では、「詩禪」と「謎」はあくまでも名称の違いであり、内容の区別に関しては触れていない。おそらく、文人が書く謎の多くが詩の形式を持ちながら禪問答と似た雰囲気をも有することから、「詩禪」という名称が付いたのではないかと推測できるが、実際には、「詩禪」という言葉は広まらなかった⁽¹⁶⁾。

『詩禪』の編者である李開先は、その序文で、明・景泰二年（1451年）の科挙において状元⁽¹⁷⁾の称号を取った柯潜が説いた論を引用しつつ、あるべき「詩禪」の形について以下のように論じている。曰く、

我が朝の状元柯潜はこう謂う。謎の句は必ずや事の変化を觀、古今に通達すべし。た

だ、時事に近づきすぎれば癒着の陋があり、逆に時事から遠ざかりすぎれば、雲をつかむように、根拠に乏しいという嫌いがある。また、文字通りの意を取ると固執に流れるが、文字から巧みに意を仮借すると狡猾に流れる。故に、隠僻の理を深く求め、それを謎という行動にうつさせるべし。日用の常から出ないようにしていれば、謎の三昧を得たと言えよう。⁽¹⁸⁾

柯潜の「謎三昧」論に含まれる主張は主に謎と時事の関係、謎と文字の関係の二つにある。その中で特に注目し値するのは、明末の時代、既に謎と日用・時事の関係性が説かれていたことである。というのは、清末以降の謎話を見ると、彼のこのような議論が継承されて、謎人の典型的な考え方の一つとなっていくからである。例えば、徐枕亜 (1889-1937) は「談虎偶録」で「謎に時事を入れれば、遊戯の中で現実に対する警戒心を呼び起こす、という意図が託されるため、作品に目新しさが生まれ、人の心を動かすことができる」⁽¹⁹⁾と論じている。要するに、「(文人の) 遊戯」に変化をもたらすのに「時事」というのが重要な文脈であるという認識は、明末からほとんど変わらなかったのである。

また、「時事」のような歴史的、社会的な文脈以外にも、謎が文学作品の中に入れられた場合、文学的な文脈が存在する。清代には多くの章回小説に燈謎が登場するが、その中で最も知られているのは恐らく曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』であろう。第22回「聽曲文宝玉悟禪機 製燈謎賈政悲讖語」と第50回「芦雪庭争聯即景詩 暖香坞雅製春燈謎」には集中的に燈謎が書かれている⁽²⁰⁾。登場人物の運命を文中の燈謎を通して仄めかすという表現手法は、これまで文学評論などの中で盛んに論じられてきた。『紅樓夢』に書かれる燈謎は小説の文脈に深く関わるため、物語にとって欠かせない一部であると考えられているが、清末になるにつれ、物語との関係性が希薄でありながらも、ただ登場人物が燈謎をする場面を長々と描写する小説が現れた。その典型が吳趸人 (1867-1910) の『二十年目睹之怪現狀』である。その中で、燈謎活動に関わる叙述は実に4章分にのぼり⁽²¹⁾、その描写も単に燈謎を羅列しただけのものではなく、燈謎のルールや術語に関しても登場人物の口を通して細かく解説され、作者が読者を教えようという意図が垣間見える。

従来、文学研究者の間では、燈謎など学識を見せびらかすような文字遊戯の類は、小説にとって本質的な要素ではなく、かえって文学性を損なう贅筆にほかならないという評価が主流であった⁽²²⁾。しかし、中国の文学史上において、作者の才学を見せびらかすことを一大主旨とする小説分野が存在しており、『中国小説史略』を著した魯迅 (1881-1936) は、そのような作品に「才学小説」という新しい名称を与えている⁽²³⁾。その「才学小説」の代表的作家である李汝珍 (1763-1830 頃) は、章回小説の形式を参考にしながら、自身の経史、音韻に関する学問をはじめとして、燈謎、酒令 (酒席で酒を勧めるための遊び) などの遊戯にいたるまでの知識を物語の中に織り込んだが、物語の枠組や人物描写などに対してはそれほど関心を持たなかったと言われる⁽²⁴⁾。李汝珍の『鏡花縁』には、才女百人が集まっ

て燈謎をする盛大な場面が描かれており、さらに、小説第 80 回には登場人物の口を借りて、謎に対する以下のような議論が挟まれている。

凡そ謎は（字義の）借用を第一（の方法）にすべし。正面（から字義を当て嵌めるの）はそれに次ぐ。しかしその借用法も二等に分けられる。例えば「国士無双」で「何謂信」と解く⁽²⁵⁾、または「秦王除逐客令」で「信斯言也」⁽²⁶⁾と解く謎がある。以上の二例も借用法を使っているが、ただ、答えは題の文字から直接連想されるものではなく、題に隠された主旨（文脈）から発想するものであるため、題の文字から直接意味を借用するような謎とは優劣に大きな差がある。近年、題文の出典から発想するもう一種の謎が現れ、参加者らはみな類書⁽²⁷⁾を手にしながらいかに調べ、謎は貼る糊も乾かないうちに一掃され、あっという間に当てられてしまうのだ。このような謎はもはや三流であろう。⁽²⁸⁾

大体謎を創るには、適切に書くべし。ぴったり当てはまるが故に解きやすい。それは清き池に映る月の影のように、遙かに映り合いながら、誰一人見えぬ者はいない。（中略）難しすぎる謎は浅薄、或いは晦渋すぎるという欠点を持つため、まるでこの場で誰かが足の指を動かしているようなものである。何故なら、足の指を動かしている本人以外、誰もそのことを知る術がないからだ。故に、はっきりとせず、適切に書かれていない燈謎を「足指動かし」と称したほうが最も趣がある。⁽²⁹⁾

この燈謎の創作方法や作品の優劣についての議論が発せられている部分も、後に謎話の雛形になったのではないかと考えられる。実際、1907 年に書かれた謎話である『紙酔廬春しすいろしゆん燈百話とうひやくわ』は、『鏡花縁』のこの箇所を真似て書かれたと言われている⁽³⁰⁾。謎の優劣とその難易度は比例しないという『鏡花縁』の指摘は、『紙酔廬春燈百話』をはじめ、後に書かれた多くの謎話においても承認され、継承されている。要するに、謎話という形式の誕生より以前から、文人らは謎に対し、何らかの評価基準を持っていたことが章回小説の描写から看取できるのである。

以上に述べた謎話の雛形から得られる考察をまとめると、一つは「謎」を指す名称を社会階層の違いによって分ける傾向が明末から見られ、その名称と社会的アイデンティティ認識とが関連付けられること、二つは現実社会における時事が「文人遊戯」の文脈として扱われること、三つは表意文字である漢字を利用するのが燈謎の中核であること、この三点である。先に述べたように、この三点は清末以降においても鮮明に現れており、継承されていたことが明らかであるが、注目したいのは、二点目に見られる「文人遊戯」という言葉の性格が、20 世紀初頭に入ると密かに変化したことである。

二 「博奕猶賢」の論法

筆者の旧稿⁽³¹⁾では、最も早く雑誌上に掲載された謎話文は古銘猷^{こめいゆう}の「謎話」⁽³²⁾であるとしていたが、その後新たな資料が見つかったことで、古銘猷「謎話」よりも早いと見られる謎話は少なくとも二作あることが判明した。筆者が現在実見した限りでは、雑誌に掲載された最も古い謎話文は、1889年に上海で発行されていた半週刊(週二回発行)の『益聞録』^{えきぶんろく}に見られる「燈謎説」⁽³³⁾という記事である。そこには以下のように書かれている。

燈謎のもう一つの名は燈虎であり、どこから意味を取って定義付けられたかは知らない。経伝^{けいでん}(四書五経などの儒教の正典とその注釈)・詩文・諸子百家・伝奇小説・俗諺・人物などを用いて事物や言葉を暗に指し、燈籠に貼り付けて人に当てさせる。当たった者には筆・墨・紙・硯・巾(布切れ)・扇・香・囊・果物などが贈呈され、それらは謎贈と呼ばれる。文人や賢者、比較的^{ひかくてき}に智慧を持つ人なら少々思考を巡らせれば解せるが、頭の鈍い者は壁に面して何時間経っても茫然として解けない。謎によって智識が啓発され、娯楽の効果が得られることが実に多い。(中略)しかし、文章を巧妙に操作する謎はただ中国のみが有するというのは甚だしい誤解である。何故なら、西洋人にも判じ絵[rebus]というものがあり、人物を描いてアルファベットを書き、その音から意味を推測させるという西洋の謎がある。文字こそ異なるが意図においては同じである。故にどうして吾が族類でないという理由だけで(西洋人を)蔑むことができようか。かつまた燈謎は小技であり、遊びに近く、婦人らがやる謎々とそれほど違わない。かの物好きの輩は自らの智巧を誇示し、人のできないことができ、人の知らないことを知っていると思い上がるが、それもまた度量の小さいことである。

作者は燈謎を有益な娯楽として評価しながら、最終的に「遊びに近」い「小技」と決めつけている。また、西洋にも似たような文化があることを提示することによって、「度量の小さい」「物好きの輩」を否定的な文脈で取り上げている。この文脈からは、清末当時において燈謎を中国特有の高度な文化現象と認識し、それを人前で誇示する「謎人」の姿が浮かび上がるが、少なくとも「燈謎説」の作者から見れば、燈謎を過大評価するような傾向は一笑に付すべき現象だったのである。

しかし、「燈謎説」以降に発表される謎話には、そのような一歩距離を置いた見方が徐々に見られなくなっている。例えば、20世紀初頭の1904年に雑誌『新新小説』に掲載された「棟蓴室談虎」^{ていがくしつだんこ}は、「小技」というキーワードを受け継いで、「彫虫の小技、壯夫は為さず。隠語度詞など、末のまた末なり」という一文から始まるが、それに続けて、

しかしながらこれも亦、わが国の古き時代の文人社会における一種の道楽であり、い

わゆる心を用いる所無きには賢^{まさ}るものである⁽³⁴⁾。しかも博奕^{はくえき}（双六や囲碁など勝負を争う遊び）に比べるとむしろ大いに優れており、ともかく及ばないことはないだろう。故に一つの遊戯として受けいれてもよろしいではないか。⁽³⁵⁾

と、『論語』の教えから「賢於無所用心／博奕猶賢」を切り出して謎の価値を説いている。1908年に書かれた古銘猷の「謎話」にも、

詩は性情を整理する効果があり、謎も亦、寂悶を破る効果がある。夜遊びするよりも謎燈に癒されたほうがよい。無為徒食の日々を過ごすよりは博奕のほうがまだよいと言われるが、それなら謎を作ったほうがなおよいではないか。⁽³⁶⁾

とある。同じく燈謎の遊戯性から出発している論であるが、19世紀末の「燈謎説」に比べ、明らかに文脈は肯定的なものへと変わっている。これが「文人遊戯」という言葉に対する意識の変化の始まりであった。

そのような意識変化には、見過ごせない歴史的背景が存在する。それは、義和団事件が終わった1901年から辛亥革命が勃発する前の1911年まで、中国では下層社会に対する啓蒙運動が盛んに進行^{けいしやうにつぽう}していたことである⁽³⁷⁾。そうした啓蒙運動の一端を窺わせる例として、1904年3月の『警鐘日報』に掲載された「馬将牌改革議案」という文章がある。筆者は文の冒頭で以下のように述べている。

国の盛衰を観るには、必ずしも大事を観るべきではなく、些細な事を見れば既に明白である。かの欧米・日本には武事を遊戯に寓することが多く、或いは物理化学的な技術を以て遊戯とする。わが国を顧みれば、そのような事例が一つもない。⁽³⁸⁾

そこで筆者は、馬将（マージャン）なら下層社会においてできない人がいないほど普及していることを理由に、マージャン牌の表面に地理や政治、新知識を彫れば、遊びながら啓蒙を行えるという、一見奇想天外な改革案を真剣に提案し、博奕の代表格であるマージャンでさえ利用しようとすることで、啓蒙への熱意を表明している。この論は同時期に現れた「博奕猶賢」の旗を掲げる謎話と合致しており、故に「博奕猶賢」論の出現も啓蒙運動に応じた自然な流れとすることができるだろう。そこには、一方的に「時事」を「文人遊戯」の文脈に取り入れるにとどまらず、啓蒙の道具として利用することによって、かえって時事に影響を与えようという積極的な意識が生じていた。その後が生じた燈謎の意識変化はそこから出発したと言えよう。

三 「小道可観」の論法

「賢於無所用心／博奕猶賢」よりいっそう多用され、決まり文句と言えるほど謎話によく見られるのは、「雖小道猶有可観（小道といえども、猶観るべきものあり）」という表現である。例えば、古銘猷の「謎話」は「小道といえども、亦心の声である」⁽³⁹⁾と書いており、「遼漢齋謎話」には「謎は小道といえども、古今盛衰の変異を見るに足りる」⁽⁴⁰⁾、また、徐枕亜の「談虎偶録」には「文虎は小道なり。しかし心智が鋭敏である者以外、此れを語るに足りず」⁽⁴¹⁾とある。

「小道」とは、先秦諸子の文脈において「大道」と対置される概念で、「つまらない、取るに足りないもの」を意味し、清代において「小道」と言えば多くの場合「小説」を指していた。この「小道可観」論は『論語』子張第十九の、

子夏曰わく、小道と雖も、必ず観る可き者あらん。遠きを致すには恐らくは泥まん。
是を以て君子は為さざるなり。

(子夏の言葉、たとえ微かな学説でも、なんとかきつと取り柄はある。しかし、それに沿って、遠くまで行こうとすると、恐らくは泥沼におちこんだように、ぬきさしのならぬことになる。だから君子は、それに従事しない。)⁽⁴²⁾

に由来する。漢代になると「儒術独尊」という文脈において、「小道」を担う稗官術士⁽⁴³⁾が「小説家」と称された。それは『漢書』芸文志「諸子略」において、

小説家者流は、蓋し稗官より出ず。街談巷語、道聴途説者の造る所なり。^(ママ)孔子曰わく、「小道と雖も、必ず観る可き者あらん。遠きを致すには恐らくは泥まん」と。
(小説家の一派は、思うに稗官から出た。小説類は、通りや路地など、道端で聴いた話をすぐに伝え説く人間が作ったものである。〔後略〕)⁽⁴⁴⁾

と、小説を小道に結びつけた。当然ながら、諸子略における「小説」は後世の文学ジャンルとしての「小説」と同じ概念ではないが、「稗官小説」＝「小道」という文脈の転換を通して、「小説」は「小道」であるという理解が定着していったと見る議論もある⁽⁴⁵⁾。

しかし、「小道」と謎とは如何なる関係性を持つのか。それを説明するには、南朝・梁の劉勰^{リゆうきやう} (466?-532) 撰『文心雕龍』の第十五「諧讖」(諧辞と隠語) 編を見るべきである。そもそも「謎」の語源を説明する際に頻繁に引用されるのがこの「諧讖」編にある、

謎なる者は、其の辞を廻互して、昏迷ならしむるなり。

(「謎」とは、言葉をぐるぐる変化させて、相手を迷わせるようにすることである。)⁽⁴⁶⁾

という解釈であり、また、同じく「諧譚」編には、

文辞に諧譚が有るは、九流の小説有るに譬ふ。

(文学の世界に諧辞や隠語が有るのは、学問の九派の中に「小説家」があるようなものである。)⁽⁴⁷⁾

という説明も見られる。「諧譚」とは「謎」であるから、この箇所は、謎の文学における地位は、九流(學術の流派)の最後に小説家があるのと同じく、文学の末端に置かれるべきものだ、という意味であり、この『文心雕龍』の認識が、自然と文人の中で広まったのであった。市民文化の時代である宋代に入ると、小説に関する伝統的な観念は大きく転向し、歐陽脩(1007-72)の『崇文総目叙釈』「小説類」には「小説を廢してはならない。(中略)俚言巷語も亦取るに足るところあり」⁽⁴⁸⁾とあり、稗官小説の類が再び「必ず観るべき者あり」の位置に戻された。恐らくその評価の転向が謎話に応用されたのが、「小道可觀」論の原点ではないだろうか。

もともと中国においては、詩文詩賦などに関して「～話」という評論文体が存在したが、それは一つの文学ジャンルが一定程度に発展し、社会において一定の地位を占めるようになったときに、自然と発生する一種の付随的な批評文である。そして、「～話」によって個々の作品の置かれる大きな文脈が取り沙汰され、作者の主体性が浮かび上がるようになり、文学議論の場が作られたとも言えよう。こういった様々な「～話」の中で、最も謎人に刺激を与えたのは恐らく「小説話」の出現であったと考えられる。元聘臣は自身が謎話を書く動機について、次のように述べている。

詩に話あり、文に話あり、詞に話あり、賦に話あり、且つ經に話あり、八股文^{はつこぶん}⁽⁴⁹⁾に話あり、對聯に話あり、ただ小説に話は無かった。しかし近人が「飲冰室小説叢話」^{つそうわ}⁽⁵⁰⁾を書き、『新小説』雑誌に掲載したため、話無き者(小説)も話を有するようになった。燈謎と言えば、度詞は左氏伝から始まり、隠語は史記に載せられ、その淵源を遡れば遙か古き時代に既に存在した。文人墨客の中にも謎を嗜む者が多い。そもそも謎は放蕩三昧で行う、ほろ酔いっぴいの娯楽であり、その場での遊びにすぎないため、話が無くとも構わないはずだが、やはりこれにもまた話が無ければならぬ、話を有すべきである。⁽⁵¹⁾

ただ、小説話はあくまでも謎話創作を促した刺激であり、内容から考察すると、謎話に盛んに持ち込まれる「小道可觀」論に直接的な影響を与えたのは、小説話というよりも清代の詩話、詞話であったと見られる。清より以前に書かれた「～話」に「小道可觀」論は

殆ど見られないのに対し、清代中期以降にそれが見られるようになるのは、おそらく次のような理由による。清代には、古学復興と考証学隆盛の反動で、「考拠・義理・文章」以外の詩詞曲小説といった文学の類は地位の下落を免れなかった。この変化に応じて、清中期からの「詩話」「詞話」のような文学批評に、「小道可観」論が「捨てられたものを拾い上げる」肯定的な意味で用いられるようになった。その場合、当然ながら、「遠きを致すには恐らくは泥まん」の部分には言及されない。特に、「詞は小道といえども、范文正、欧陽文忠も曾て好んで為していた」⁽⁵²⁾のような、先代大儒の名を挙げて詩や詞の由緒正しさを強調しようとする論法は容易に謎にも当て嵌めることができた。そのため、民国の謎人たちはこの論法を借り、謎を士大夫が作ってもよいものであると説いたのだが、そのため、常に民間の俗なる事物謎との区別、すなわち「謎」の「雅/俗」の別が意識されることになった。

謎の雅俗を分けるべきだと最初に説いたのは、1913年の「すいかんさいめいわ邃漢齋謎話」であった。作者のせつほうしやう薛鳳昌 (1876-1944) は、

謎には書家・江湖の別があり、即ち雅俗である。意が俗であっても語は俗でないものもあれば、語が俗でも厭らしさはなく、雅の道に傷つかないものもある。(中略) そういった謎は書家の意から脱していないため、誠に文人の遊戯と言える。⁽⁵³⁾

と強調した。「書家の意」とは具体的にどのようなものか、彼は例を用いて「字学に通じる謎」「訓詁に通じる謎」「数学に通じる謎」「経学に通じる謎」と、作品を分類し、それらの例に関して「必ずこのような謎こそが、初めて書家の意を得ていると言えよう」⁽⁵⁴⁾と評価した。つまり彼にとって、清代に重んじられた学問である「小学」「訓詁」「数学」「経学」を謎に応用することこそ、「書家の意」(文人氣質)と評価されるかどうかの基準であった。この基準は、清代考証学の影響を受けて洗練された、清代の燈謎あつてこそその評価である。

さらに、謎の「小道」論はただ「観るべき者あり」と主張することとどまらず、同時に「小道」を極めることの難しさが強調された。「邃漢齋」は「謎は遊戯に属すると言うが、無学な者には断じてできない」⁽⁵⁵⁾と主張するが、その難しさは学問を要求するということだけから来ているのではなく、旧来の学問を保ちながら変通していけるような、いわゆる「別才」も必要とされる点にあるのだという。すなわち、通常の考え方から逸脱できるような思考力のことである。

謝明新は「謎語」(1914年)においてこう語っている。

謎を当てるのは難しいが、謎を作るものまた容易なことではない。平素の読書において特別な心得がある者でなければ、恐らく一作もできないだろう。(中略) 謎に最も要求されるのは渾成(語句が自然であること)であり、一旦鄙俗とかかわれば文人口調を

失うことになる。⁽⁵⁶⁾

しかし、完全に俗と隔離する必要はなく、徐枕亜の「談虎偶録」に書かれているように、「俗語を謎に取り入れる場合、俗を雅に化せる謎こそが良い謎である」⁽⁵⁷⁾ という捉え方もあった。このように「学」「別才」「雅」が清末民国期の謎話において共通のキーワードとなったのは、「小道可觀」論を超越しようとする意識の変化を示したものであった。

四 雑誌・新聞の潮流に乗って

以上は、清末から、おもに1910年代までを対象に、謎話の雛形と、謎話の典型的な論法の思想的水源を探ってみたのであるが、そこからは、小説話が注目されたことに刺激を受け、謎人たちもまた創作主体の声を「～話」という文学ジャンルを通して外界に届けようと試みたことが見えてきた。その中には、創作者の地位上昇への欲求が隠されていると考えられる。すなわち、謎を正統文学に仲間入りさせ、生業の一つとして成り立つほど謎の注目度を上げたい、それこそが謎話創作の真の目的だったのではないだろうか。民国になって謎話の数が急激に増えたのは、近代ジャーナリズムの激増によって拍車が掛かったためと容易に想像しうるが、「燈謎」をめぐる文人意識の変化がどのように近代ジャーナリズムに影響を与えたかについても考察の必要がある。この節では、謎話が新聞雑誌の力を借りて発展する様相を眺めながら、その影響のあり方を明らかにしたい。

梁啓超は1902年に雑誌『新小説』を創刊し、啓蒙の大旗を掲げ、小説を社会改良に結びつけ、大きな反響を呼び起こしていた。小説と文芸評論以外にも戯曲や笑い話、歌謡なども付録として掲載したため、その形式は後に創刊された多数の小説雑誌に踏襲され、付録の範囲も次第に広がっていった。こういった状況は1910年以降になると、更に新たな変化が見られるようになり、「小道集成」を目指していた小説雑誌には「小道」に関する理論的な文章も掲載されるようになった。例えば、1910年に創刊した『小説月報』は、第1巻第2号に「征文懸賞」(懸賞論文公募)を發し、「詩詞、雑著及び遊記、隨筆、異聞、軼事いつじの作」の投稿を呼びかけ⁽⁵⁸⁾、そこには総合的な筆記以外に、伝統文人の「韻事」を主題にする雑記が次々と載せられていた。いわゆる「文人韻事」には、きんき琴棋書画や文字遊戯、古玩、花鳥虫魚などが含まれるが、近年の研究ではこれらの事物を「文化微物」と呼んで、こういった「微物崇拜」の文化現象を中国特有の近代性と繋げて考える研究者もいる。胡曉真の研究によると、微物崇拜は文人の伝統的教養を直接継承し、習得するきっかけであり、その中には伝統文芸を学術化する試みも含まれており、その学術化の傾向は謎話の出現において最も典型的に見られたという⁽⁵⁹⁾。

ここで『小説月報』を例に、編集者の編集スタイルによって謎話の境遇がどのように変化したし、そしてその変化が如何に編集者の理念に影響したかを考察する。『小説月報』は創刊

後の第1, 2巻と第3巻の第1号から第4号までは王蒞章^{おうしんしょう} (1884-1942) が編集長を務めていた。創刊号の「編集大意」からは王の編集スタイルが読み取れる。「各小説の末にさらに訳叢, 雑纂, 筆記, 文苑新智識, 伝奇, 改良新劇など諸類の文を置き, 説部 (小説) の範囲を広め, 報余 (余白) の編集の一助とする」⁽⁶⁰⁾ と。したがって, 謎と謎話も彼にとっては, 余白を埋める材料の一つにすぎなかった。実際, 創刊した年から謎は余白の中でのみ取り上げられている。

最初に『小説月報』に載せられた謎話は「簧冷軒謎語」^{こうれいけん} ⁽⁶¹⁾ であり, 謎に関する三つのエピソードが書かれている。しかし, 第3巻第5号から第8巻までは編集長が王蒞章から憚鉄樵^{うんてつせう} (1878-1935) へと変わっており, そのバトンタッチによって, 『小説月報』の編集スタイルも徐々に変化した。憚鉄樵は王蒞章に比べ, もともと雅文学雑誌を作る志向が強く, 彼はいくつかの欄を調整し, 小説以外の内容を更に増やしたのである。例えば薛鳳昌の「遼漢斎謎話」は第4巻から二年に亘る長い連載が始まったが, 大まかな掲載枠は王蒞章が編集長を務めていた時から継承されてきたものであるため, 「遼漢斎謎話」は細かく段落分けされ, 各段落が1頁という長さで, 依然として余白の所に細々と入れられていた。

ところが, 謎話の掲載ルールはとあるきっかけによって覆された。それは第6巻第8号の「本社函件最録」コーナーに載せられた「張君起南來函」である。張起南 (1878-1924) は手紙の中で「遼漢斎謎話」を称讃し, 第6巻第5号で連載が終了したことに対する遺憾の意と, 次なる謎話文への期待を述べた。続いて彼は編集者に,

材料が豊富であれば, 紙面を1, 2頁くらい開放し, この種の文章を掲載すべきである。単に余白の埋め草として, 日常短文や広告と同じ扱いでは勿体無い。ただ, 書家と江湖両派の取捨選択は必ず厳格にして頂きたい。⁽⁶²⁾

と提案した。そして彼も「小道可観」論を説き, 「謎は小道といえども, わが国の文学において美学的な要素の一つであり, 今から保存していけば尚知る者はいるが, 数十年後になると, 恐らく難渋不可解との嘆きが聞こえてくるだろう」という憂慮も示したのである。

その手紙に対し, 次の号に憚鉄樵は返答を載せ, 同時に「文虎」という欄を新たに設けた。「文虎」欄の創設に当たって, 憚鉄樵は以下のような考えを述べている。

凡そ文虎は必ず四書五経, 詩, 古文と関連する。文虎は国粹 (文化・芸術の精華) とは言えないが, 四書五経, 詩, 古文はすなわち国粹である。故にこのご時世に文虎をやるのは, 単に物好きなためではなく, 上述したような国粹が今日の人にどれほど覚えられているかを究明できるのではないかと考えるからである。⁽⁶³⁾

このように, 編集長憚鉄樵の強い後押しを受け, 張起南の「橐園春燈話」^{たくなしんとうわ} が『小説月報』

第7巻から余白ではなく、「雑俎」という欄で連載されるようになり、その後の謎話に多大な影響を及ぼした。

しかし、『小説月報』第8巻第1号に載せられた「編集余談」を読むと、小説という「正文」が少なくなり、筆記や雑俎などの付録のほうが逆に多くなったことを疑問視する読者が現れたことも分かる。そのような批判の声に対し、惲鉄樵は「それも亦国粹を保存するための一つの道である」⁽⁶⁴⁾と、少しも妥協しなかった。それが直接的な理由となったかどうかは確定できないが、次の年には惲鉄樵の編集長職が解かれ、第9巻からは王蘊章が再び編集長の座に返り咲いた。その後も『小説月報』に謎や謎話類の文章は載せられているものの、「遼漢齋」や「棗園」のような長編連載は見られなくなったのである。

上述のように、『小説月報』において謎話の連載は一旦下火になった。ところが、およそ同じ時期に『申報』の文芸面「自由談」に「謎話」という欄が創設された。そして1916年11月から1918年12月までの二年間、「謎話」欄には多数の謎話文が掲載された。全国的に発行部数の多い『申報』の影響で、「謎話」が社会的に馴染みのある語彙となったのではないかと考えられる。「謎話」欄の文章は、最初は「自由談」編集部の編集者、特にその中の一人、えんおう こちようは 鴛鴦蝴蝶派⁽⁶⁵⁾の代表作家であるちんく 陳栩(1879-1940)が「栩園」と署名して書いたものが多い。また、栩園が自分の周りにいる謎人の名前や良作と思う作品を「謎話」欄で紹介すると、名前が挙げられた人物が彼の代わりに次回の「謎話」欄に投稿することもある。こうして徐々に「謎話」欄の執筆者はバトンタッチされていった⁽⁶⁶⁾。

また1917年7月6日の『申報』には、同年4月に刊行された謎話集、薛鳳昌編纂／惲樹珏校訂『遼漢齋謎話』と張起南撰『棗園春燈話』(いずれも文藝叢刊甲集、上海：商務印書館)の書籍広告もたびたび載せられており、そのキャッチコピーにも「此れ小道と雖も、国粹の託す所なり」という言葉が入っている。さらに、『申報』「自由談」の「謎話」欄にも長編連載が現れ、例えば1918年10月11日から謝会心の「文虎識略」が14回に亘る連載作品として掲載されたが、その「文虎識略」の冒頭にも「文虎は国粹とは言えないが、四書五経、詩、古文などはすなわち国粹である」⁽⁶⁷⁾と惲鉄樵の言葉がそのまま引用されている。このように、謎を国粹保存の手段と観るべしという説は「小道」論に次いで広く用いられた。

五 「博奕猶賢」論の危機

1920年代に入ると、五四・新文化運動の衝撃を全面的に受け、一部の小説雑誌が新文化思潮に乗って編集方針を変えた。例えば、同じく王蘊章が編集長を務める『婦女雑誌』には、1919年の第5巻まで「謎画徴射」の欄が設けられ、燈謎が載せられていたが、1920年から白話を主体とする文体に変わり、謎のほうも「白話謎語」と変わった。一方、一部の雑誌は「足を削って靴に合わせる」⁽⁶⁸⁾ように新文化思潮に同調することを拒否し、停刊

を決意した。そんな中、北京、上海における影響力の大きい謎社は次々と解散した⁽⁶⁹⁾。

しかし、20年代中期になると再び謎が流行するようになる、という興味深い現象が見られる。1925年に『東方雑誌』第22巻第8号に掲載されたW生の「謎之話」は、当時上海で流行っていた「詩謎」について、次のように記し、評価を下している。

近來上海で新しい流行病が発生している。その流行りはあまりにも速く、広く、何ヶ月も経たないうちに、少しでも文字を識っている人には殆どこの病が感染した。この新しい病を「詩謎狂」と呼ぼう。詩謎は本来、雅人たちが行う盛事（めでたい行事）であったが、現在は上海において最も普及した遊戯となった。上海の遊戯場と公共娯楽地に行けば、あららこちらに詩謎の屋台が見られる。殆どの小報（赤新聞のような頁数の少ない新聞）の後ろに「詩謎徴射」という広告がずらりと載っている。最も遊び好きだった上海人は、こぞって音韻諧律に浸り、国粹であるマージャンも、ヨーロッパ伝来のトランプも、全て投げ捨てた。結局古本屋がいい商売になり、昔から売れない知られざる詩集や試帳詩（科挙試験に応じて作られた詩）、『詩韻合璧』『佩文韻府』⁽⁷⁰⁾などがすべて売り切れとなった。前人曰く、六朝時代は野菜を売る傭人ですら風雅な気質を帯びていたと。今日では、上海の洋行（外資企業）職員や店の店員、誰も彼もみな詩人となっている。「雅道が喪われた」という憂慮はもはや要らないだろう。

現代になると、物質の進化が精神の進化より迅速であるがため、現代人は朝から晩まで現実の物質的な生活にしか関心を持たず、誰も智慧を使う遊戯などに参加する時間は無かった。テニス、サッカー、水泳、映画、ラジオは現代青年にとって数少ない娯楽である。頭を絞ってやるような文字遊びは当然やる人が殆どいなくなった。最近流行りの詩謎とクロスワード・パズルは、現代における一種の反動と見ていいだろう。ただ当然、その反動が良い現象なのか、悪い現象なのかは別問題である。⁽⁷¹⁾

新文化の波を押し返して、謎ブームが再来したとも見られるような現象だが、果たしてこの文章の言う通り、それは物質的な生活に対する反動であり、智慧を使う遊戯なのか。まず、そもそも「詩謎」とは何か。主な形式としては、聞きなれない詩句をお札に書き、その中の一文字か二文字を○などで隠し、その隣に四文字か八文字の選択肢を書いて、元の字を当てさせるという「敲詩」または「打詩室」という別称を持つものである。詩謎に関しては、既に清末に書かれた『津門雜記』の中に記録があり、「風雅に名を託すが、実は賭博なり」⁽⁷²⁾とされている。この形式は後に徐々に一種の賭け事となり、詩句の文脈に関係なく単なる運試しとなったため、流行りだした二三年後にはすっかり人気を失ったという⁽⁷³⁾。これは、詩句の韻律や文脈にすべて合わせないと字謎が解けない仕組みになっているが、逆に元の句を知っていれば簡単に解答できるため、まさに『鏡花縁』の言うところの「三流の謎」である。「古書店がいい商売になった」のもそれが原因であった。「博奕猶

賢」の論と対照して考えると、頗る風刺的な状況とも言えよう。しかし、なぜ新文化運動の後に詩謎が流行り出したのか、恐らくそれは燈謎の低迷と時勢の不安定によって大規模な謎社が解散したためであろう。遊楽場用の燈謎を新たに創作する人がいなくなり、さほど智力と技術も要らずに参考書さえあれば大量に作れるこうした詩謎がそれに取って代わった。

詩謎が賭博の一種へと墮落した状況を経過した後、1927年の『涇廬謎話』は、このような偽りの繁栄に対して、国学の衰微にあわせて下り坂を歩み続ける燈謎の行方を憂慮しながら、最大規模の謎社である「萍社」が解散される前の時代の、上海の遊楽場における燈謎の盛況を懐かしんだ文章である⁽⁷⁴⁾。それと歩調を合わせるように、『申報』の「自由談」にも十数年ぶりに謎話が再び掲載されるようになった。1927年2月15日には吳蓮洲の「春燈謎話」(第16面)が載り、16日には陳榑の「度詞小例」(第17面)が載った。さらにその一年後、萍社の元メンバーによる大中虎社が成立し、1928年3月27日の「自由談」に「大中射虎記」(第17面)が掲載された。その後も「自由談」には大中虎社の活動の告知や「射虎余談」⁽⁷⁵⁾などが載せられていた。

各々の新聞紙、雑誌に掲載するだけでは交流と議論を交わす場がまだ十分ではないと感じる人々により、燈謎及びそれに関する創作談などの文章をまとめて掲載する専門誌の必要性が認識されるようになった。まずは上海で1930年から1931年にかけて全2巻27期発行された『文虎半月刊』には、主に創作論が載せられ、燈謎の学術化の傾向が最も鮮明に現れている。1931年の第2巻10期に掲載された謝会心の「科学謎話」に書かれているように、「昨今科学が発達し、文化が日々進歩している。古籍旧書の類は大体放棄された。潮流に同調する為には全ての謎を新しい面目に変えなければならない」⁽⁷⁶⁾と、謎人が積極的に新しい変化を求める姿勢を打ち出している。その後は戦争の影響によって編集者が上海を去り、1936年に湖北武昌で再開された。梁実秋(1903-87)はその年に「科挙が廃れ、謎の一道は衰えていくだろう」⁽⁷⁷⁾と書いているが、実際には、その後も上海に『黒皮書』、『虎会』など謎の専門誌が創刊され、謎話の掲載数は減らなかった。そんな中、「謎話小史」⁽⁷⁸⁾のような「謎話についての話」も現れたのである。これは、燈謎を国粋保存の一端とみなす意識よりさらに一步進み、そこに新思潮を組み込もうとする変化を示している。

六 民俗学との角逐

既に述べてきたように、謎話は最初の「博奕猶賢」論から「小道可觀」論、「国粋保存」論まで、雅文学志向を次第に強めながら、謎人の中で広く行き渡るようになった。こうした謎話に見られるように、文人の謎を民間の謎や児童の謎と区別しようとする傾向が徐々に鮮明になる一方、新文化運動の波に押され、燈謎は時には低調に陥り、時には活路を見出し、試行錯誤しながら新しい形式を模索していたものと見られる。

20年代末から始まる謎話の再興と同じ時期に、民間に流布する謎が、誕生して間もない中国民俗学の分析の視野に入ることとなった。周作人(1885-1967)は「謎語」という文の中で、

原始の制作は常に豊富な想像、新鮮な感覚、^{じゅんぼく}醇朴にして奇抜な連想や滑稽を具有するがゆえに、多く詩的趣味を含み、後来の文人の灯謎のようにもつぱら^{そうかん}繊巧さと双関^か〔^かけこ^と〕および^{あんしや}暗射^{あて}〔^すり〕をもって手並を見せようというのとは違う。すなわち謎語は原始の詩であるのに反して、灯謎は単なる文章工場内の小細工にすぎないのだ。⁽⁷⁹⁾

と書いている。

また、広州の中山大学言語歴史研究所によって「民俗学会叢書」として立て続けに三冊の本が出版された。その三冊とは、銭南揚の『謎史』(1928年7月)と劉万章編『広州謎語』(1928年9月)、それに白啓明編『河南謎語』(1929年1月)である。例えば劉万章『広州謎語』には、鐘敬文(1903-2002)⁽⁸⁰⁾による序が付いており、そこで文人の謎についてこう述べている。

作品の階級性から言えば、既に半貴族的なものであり、純浄なる民間のものではない。しかし、民衆の中においてその影響力は小さくない。⁽⁸¹⁾

つまり、民俗学者は「純浄」な「民間的」なものにこだわる姿勢を持っているのだが、一旦民間に降りて収集してみれば、結果的に集められるものは、多くが通俗化された燈謎にすぎないというのである。

さらに、1930年に出版された陳光堯『謎語研究』は、

現在のいわゆる「謎」は二種類に分化している。一種は民間の謎語であり、その性質及び構造には天然の美が現れているため、芸術的価値が極めて高い。(中略)そしてもう一種は旧時の文人が嗜好する詩文謎であり、すなわち前述したいわゆる「虎」または「燈虎」である。(中略)この種の謎文はとっくに芸術的価値を失っており、完全に彫琢された枯木である。ただ旧文人らにとって痼習を改めるのが難しく、幾ばくもない余命をかりうじて繋いでいるだけである。⁽⁸²⁾

と評価を下している。しかし、彼の予想とは裏腹に、科挙時代が過ぎ去り、生命力を失っていたはずの燈謎は21世紀の現在になお生きている。

30年代に発表された謎話の中でとりわけ注目すべきなのは梁実秋の「談謎」であるが、実際、これを謎話のジャンルに入れるべきか否かを判断するのはやや難しい。梁実秋の「談

謎」は白話文体で書かれており、謎話というよりも雑文またはエッセーと言ったほうが適切かもしれない。彼は中国における文学的な謎について以下のように論じた。

民間で流行る謎と児童読本の中の謎はさて置き、謎と文人の関係だけを言えば、中国与外国の状況はかなり異なっていると認めざるをえない。外国の謎も文人が書いたものではあるが、性質から見ると民間の、児童の謎とそれほど差はない。どちらも「状物」⁽⁸³⁾の類に属し、題は描写的な文章であり、答えは事物となっている。それに対して中国文人による謎は本物の文字遊戯であり、題と答えの両方とも文字の綴りでできている。故に中国文人の謎は外国の謎よりも奥深く、曲折的で巧妙である。(中略) 中国の文人は文筆を弄ぶのが上手く、互いに腹を探り合うような文章を書くのが得意である。八股文や策論を書くのが職業であれば、謎を創って解くのは余興であろう。一貫して文字上において手管を弄することである。後天的に習得するものが遺伝するかどうかは言えないが、文字を弄する習慣はもはや中国文人の天性になったのではないだろうか。⁽⁸⁴⁾

同じく謎人ではなく、謎人を傍観する文人が書いた評価として、梁実秋のこの文章は1889年に書かれた「燈謎説」に比べると意識の変化が著しい。「燈謎説」は燈謎と西洋の謎が共通点を持っていることを強調しているのに対し、梁実秋は中国文人の謎と外国の謎とに性質上の差を見出し、両者における最大の区別は文字にあることを指摘している。

梁実秋と同じように、燈謎と八股文の関係に関しては、周作人も1930年に「八股文を論ず」や1940年前後に書かれた「漢文学の伝統」などで度々論じていたが、1932年に行った講演「中国新文学の源流」では燈謎を「低級」なものと呼んでいる⁽⁸⁵⁾。これは彼が民俗学者として抱いた民衆文化観を拠り所とするものであった。

このように、文人の謎が時代遅れの旧物であるという意見は民俗学の中で高まっていた。民俗学者は「謎語」を選んで純朴な民間の謎を指すことにし、「燈謎」「燈虎」などの積弊を不純物とみなして排除しようとした。一方、謎人のほうは既に彼らの中で文人の謎に関し、一つの理想像を作り上げていた。その理想像には、博奕より有益な娯楽性を持ち、小説と同じく文学性と啓蒙性に優れ、儒家経典や伝統的教養と同じく国料保存の対象として大事に扱われるべしといった要素が詰められていた。中国の「謎」のあり方に対する両者の認識が葛藤し、歩み寄りにくい状況に陥った。したがって、「燈謎」と「謎語」概念の分離は謎人と民俗学者両方に引き裂かれた結果と言えよう。

おわりに

本稿の議論を最後にまとめておきたい。本稿はなぜ現代中国語において「燈謎」と「謎

語」の区別が一般化したか、という疑問から出発し、一次資料として謎話という時代的特徴のある文学スタイルを取り上げた。謎話に見られる意識の変化は、清末民国期における社会運動に対する中国文人の独自の解答という側面を有していた。謎話は漢字の表意文字としての特徴と長い科挙時代を経て累積してきた伝統的教養とに基づき、新文学運動による新思潮を吸収しつつ、近代ジャーナリズムの波に押されるだけでなく、自らも積極的に社会に影響を与えてきたことが明らかである。

本稿では、科挙時代の伝統的教養を存続させようとしながら、執拗に新文化運動に抵抗するのではなく、新旧知識の流れを漢字文化で統合しようとした、独自の道を拓く文人集団としての「謎人」の活動を分析した。謎人らが使った代表的な論点である「博奕猶賢」「小道可觀」「国粹保存」はいずれも一見伝統的な儒家思想だが、文脈を考察していくと、それぞれ当時の社会的思潮を取り入れており、積極的な意識の変化が見られる。それらの意識の変化には四つの段階がある。博奕を超えて啓蒙への変化、そして、「小道可觀」を超えて「小道実難（小道を極めることの難しさ）」へという意識の変化、さらに、燈謎に対する認識は「やってもやり損じないもの（文人遊戯）」から「保存すべきもの（国粹）」へと発展し、最後には、「保存」と新しい作品スタイルの「創造」が繋がった。燈謎が現在もなお存続しつづける理由は、中核的な要素である漢字が持つ巨大なる生命力や漢字文化の包容性などのほか、前述したような文人集団の意識の変化が大きな推進力となっていることにある。ただ、「燈謎」と「謎語」の関係をどのように理解し、燈謎の学術化が民俗学を始めとする近代的学術にどのように接近したかに関しては、視座を変えて考える必要がある。

本稿は清末から民国期に発表された謎話及び関係する資料を分析し、代表的な論点を選択して「燈謎」と「謎語」が異なる概念となった過程について考察を試みたが、各謎話の中で展開される具体的な論点や燈謎作品の分析に関しては考察が及ばなかった。漢字文化の背景にある社会的思潮の変遷に沿って考察すれば、そこにはまだ多くの解明すべき「謎」が残されている。漢字文化の一事象である燈謎を開口部にし、漢字とイデオロギーの関係性の解明を今後の課題にしたい。

〔注〕

- * 引用文中および固有名詞の漢字の旧字体は、原則として新字体に統一した。
- * 日本語からの引用では、引用者によるルビには丸括弧を付して、原ルビと区別した。
- * 丸括弧内の丸括弧は亀甲パーレン〔 〕に替えた。

- (1) 鈴木虎雄「支那文学に於ける語戯」、同『支那文学研究』東京：弘文堂書房、1925年11月、653-54頁。
- (2) 同上、653頁。「譚語」とは戯れ言である。
- (3) 劉侗・于奕正／崔翟校注『帝京景物略』宋明清小品文集輯注1、上海遠東出版社、1996年11月、

103 頁。

- (4) 元宵節と同じく、旧正月の15日。
- (5) 詩の各節行頭から意味のある単語や文が取り出せる詩のこと。
- (6) 田汝成／中華書局上海編輯所編輯『西湖遊覽志余』卷二十「熙朝樂事」，中国文学参考資料叢書，北京：中華書局，1958年11月，355頁。
- (7) 張岱／屠友祥校注『陶庵夢憶』宋明清小品文集輯注1，上海遠東出版社，1996年11月，168頁。「四書」とは『論語』『孟子』と『礼記』中の「大学」「中庸」を言う。『千家詩』とは宋の劉克莊によって編纂された、村塾で童蒙の誦読に用いた詩の本。
- (8) 「謎社」とは燈謎の製作者である「謎人」による結社。
- (9) 『申報』1872年12月14日，第2面，署名「柳浦漁子」。
- (10) 文虎は燈謎の別称である。梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』（莊藏点校，明清筆記叢書，上海古籍出版社，1982年8月），86頁，『清稗類鈔』「文学類二」の「謎の名称及び原起」（徐珂編，上海社会科学院歷史研究所集体整理，熊月之等審閱，海南：國際新聞出版中心／誠成文化出版，1996年1月），1421頁参照。
- (11) 『申報』1873年1月13日，第2面，署名「護花鈴館控仙史稿」。「廋辭」「廋詞」とは「隱語」「謎語」の意味。『国語』晋語五に「有秦客廋辭於朝，大夫莫之能對也（秦からの客が宮廷で廋辭を使ったところ，大夫たちには対応できる者がいなかった）」とある。左丘明撰『国語』二十五別史5，濟南：齊魯書社，2005年1月，196頁。
- (12) 蔵鈞とは，梁の宗懐撰『荆楚歲時記』の記載によると，二組に分かれ，お互い小石を掌の中に握み，その数を当て合う遊戯である（宗懐撰／宋金龍校注『荆楚歲時記』太原：山西人民出版社，1987年9月，69頁）。射覆とは，『漢書』東方朔傳の記載によると，裏返された器の下に物を隠し，その名を当てる遊戯である（班固撰／顔師古注『漢書』第9冊，北京：中華書局，1964年11月，2844頁）。したがって，「蔵鈞射覆の旨」とは隠されたものを当てるといった程度の意味になる。
- (13) 文義謎は即ち漢字漢文の特性を利用した文学的な謎であり，事物謎は事物の外形や性質などを述べてその名称を当てさせる所謂「なぞなぞ」である。
- (14) 陸滋源編著『中華燈謎研究』南京：江蘇科學技術出版社，1986年5月，57頁。
- (15) 高伯瑜等編『中華謎書集成』第1冊，北京：人民日報出版社，1991年5月，7頁。
- (16) 李開先の『詩禪』以外の用例は見られない。
- (17) 状元とは，天子が行う最終試験（殿試または廷試）に首席で及第した者を言う。
- (18) 「詩禪又序」，高伯瑜等編『中華謎書集成』第1冊，人民日報出版社，1991年，37頁。
- (19) 徐枕亜『談虎偶錄』『吳人謎話文獻三種』（中華謎書集成・謎話專輯叢書，『蘇州謎苑』増刊）蘇州：蘇州市謎學研究会，2009年12月，97頁。
- (20) 曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』北京：人民文学出版社，1982年3月，300-16頁（第22回），686-705頁（第50回）。
- (21) 第66，67，74，75回。吳趸人著『二十年目睹之怪現狀』王偉主編・中国古典譴責小説精品，北京：中国文聯出版社，1999年2月，452-59頁（第66回），460-67頁（第67回），515-22頁（第74回），523-30頁（第75回）。

- (22) 陳幸蕙『「二十年目睹之怪現狀」研究』国立台湾大学文史叢刊 61, 台北: 国立台湾大学出版委員會, 1982年6月, 171-72頁。
- (23) 魯迅「中国小説史略」『魯迅全集』第9卷, 北京: 人民文学出版社, 2005年11月, 250頁。
- (24) 李時人「出入『乾嘉』: 李汝珍及其『鏡花縁』創作」『国学研究』第4卷, 北京大学中国伝統文化研究中心, 1997年7月, 386頁。
- (25) 謎の文章は『史記』淮陰侯列伝の「何曰、諸將易得耳。至於信者、国士無双(蕭何は言った。他の將軍たちなら似たような人材は容易く見つかるでしょう。しかしこの韓信という人物は、国に並ぶものがおりません)」の一文に由来する。司馬遷撰『史記』北京: 中華書局, 1959年9月, 2611頁。何は蕭何, 信は韓信。本来は蕭何が劉邦に韓信という人材を推薦する場面を描いた文章である。ここでは、蕭「何」が韓「信」のことを「謂」っている典故から、『孟子』盡心編にある「何謂信(信とは何ぞや)」という文を想起させることで、一個の謎となっている。史次転註訳『孟子今註今訳』台北: 台湾商務印書館, 1978年9月, 402頁。
- (26) 『史記』李斯列伝によると、秦の皇帝嬴政が国内の客卿(他国から来て大臣の位にある者)に追放令を出した後、李斯が政に手紙を出して追放令の撤回を求めた。それが「秦王乃除逐客之令」であり、それで李斯は再び信任され、官位を取り戻したという。司馬遷撰『史記』北京: 中華書局, 1959年9月, 2546頁。嬴政が李「斯」の「言」を「信」じたという典故から『孟子』万章編にある「信斯言也(この言葉が真実ならば)」という文に結びつき、一個の謎となる。史次転註訳『孟子今註今訳』247頁。
- (27) 中国古代において、各書籍より種々の知識を抜き出して部門別に分類、編集した百科事典のような書籍である。
- (28) 李汝珍『鏡花縁』自強文庫, 中国古典小説名著百部, 北京: 華夏出版社, 1994年1月, 374頁。
- (29) 同上, 376頁。
- (30) 亢聘臣「紙醉廬春燈百話」『吳人謎話文獻三種』35頁。
- (31) 吳修詰「近代における漢字文化新分野の形成——文義謎を例として」『アジア地域文化研究』第9号, 2013年3月, 69-88頁。
- (32) 初出は『国学萃編』第1期(1908年12月), 第2期, 第4期, 第6-8期(以上1909年1-4月)。
- (33) 『益聞録』901期, 第11冊, 上海徐家匯匯報館, 1889年9月, 440頁。
- (34) 『論語』陽貨第十七「子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎、為之猶賢乎已(子曰わく、飽くまでも食くわいて日を終え、心を用うる所無きは、難いかな。博奕なる者有らず乎、之を為すは、猶お已むまに賢されり)」。朱熹撰『四書章句集注』中華書局, 1983年10月, 181頁。読み下し=吉川幸次郎『論語』下, 新訂中国古典選第3巻, 1966年1月, 283頁(ルビは適宜省略)。
- (35) 著者不明「棟蓐室談虎」『新新小説』第1巻第3期, 1904年11月, 頁番号なし。
- (36) 古銘猷「謎話」, 蔡建榮主編『謎話匯編十八種』浙江: 杏林文虎書齋, 2011年7月, 290頁。
- (37) 李孝悌『清末の下層社会啓蒙運動: 1901-1911』台湾學術叢書, 石家庄: 河北教育出版社, 2001年11月, 23頁。
- (38) 『警鐘日報』1904年3月14日, 第2面。
- (39) 古銘猷「謎話」288頁。
- (40) 薛鳳昌「遼漢齋謎話」『小説月報』第6巻第5号, 1915年5月, 「慧因室雜綴」46頁。『小説月

報』には通し頁数がなく、各作品にそれぞれ頁数が付けられている。「遼漢齋謎話」は余白の埋め草として、この作品の46頁目に載っている。以下、『小説月報』からの引用では、各作品ごとの頁番号を示す。

- (41) 徐枕亜「談虎偶録」『吳人謎話文獻三種』87頁。
- (42) 『論語』子張第十九「子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不為也」。朱熹撰『四書章句集注』188頁。読み下し・通釈＝吉川幸次郎『論語』下、313頁（ルビは適宜省略）。
- (43) 「稗官」は民間の風聞を集めて奏上した下級役人。「術士」は、医術や占いなどの方術に優れた人。
- (44) 陳国慶編『漢書芸文志注釈彙編』二十四史研究資料叢刊、北京：中華書局、1983年6月、163頁「小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗說者之所造也。孔子曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子弗為也」。
- (45) 饒龍隼「諸子「小説」正義」、全国重点学科・中国古典文献学教育部百所重点研究基地・四川大学中国民俗文化研究所編『新国学』第4巻、成都：巴蜀書社、2002年12月、31-57頁。
- (46) 劉勰著／范文瀾註『文心雕龍註』上下、中国古典文学批評理論叢刊、北京：人民文学出版社、1962年12月、271頁「謎也者、廻互其辭、使昏迷也」。読み下し・通釈＝戸田浩暁『文心雕龍註』上、新釈漢文大系64、明治書院、1974年11月、223頁（ルビは省略）。
- (47) 同上、272頁「文辭之有諧譏、譬九流之有小説」。読み下し・通釈＝戸田浩暁『文心雕龍註』上、224頁（ルビは省略）。
- (48) 歐陽脩「崇文総目叙釈」『歐陽文忠公文集』四部叢刊本、文集一百二十四。
- (49) 「八股文」とは、明清時代に、科挙の答案として用いられた特殊な文体のことである。
- (50) 梁啓超（1873-1929）が編集長を務める『新小説』雑誌の第8号（1903年8月）から連載し始めたコラムである。
- (51) 亢聘臣「紙醉廬春燈百話」43頁。
- (52) 陸鑿「問花樓詞話・自序」、唐圭璋編『詞話叢編』第1冊、北京：中華書局、1986年1月、2537頁。范文正（仲淹、989-1052）は「岳陽樓記」で知られる北宋の政治家・文学者。歐陽文忠（修、1007-72）は唐宋八大家に数えられる北宋の政治家・文学者。「文正」「文忠」はいずれも諡。
- (53) 薛鳳昌「遼漢齋謎話」『小説月報』第5巻第6号、1914年9月、「吁齋童話」8頁。
- (54) 同上、第4巻第7号、1913年11月、「小木工」10頁。
- (55) 同上。
- (56) 謝明新「謎語」『学生雑誌』第1巻第6期、1914年11月、15頁。
- (57) 徐枕亜「談虎偶録」104頁。
- (58) 「徵文懸賞」『小説月報』第1巻第2号、1910年9月。
- (59) 胡曉真「知識消費、教化娛樂与微物崇拜——論『小説月報』与王蘊章の雜誌編輯事業」『中央研究院近代史研究所集刊』第51期、2006年3月、55-89頁。
- (60) 「編集大意」『小説月報』第1巻第1号、1910年8月。
- (61) 同上、第2巻第10号、1911年12月、「諧文」10頁。
- (62) 同上、第6巻第8号、1915年8月、「本社函件最録」1頁。
- (63) 同上、第6巻第9号、1915年9月、「余霞」1頁。

- (64) 同上, 第8巻第1号, 1917年1月, 「編輯余談」6頁。
- (65) 「鴛鴦蝴蝶派」とは民国初期において活躍した文学グループ。主に才子佳人の恋愛小説を多く創作した。その名は晚清の小説家魏子安の作品『花月痕』中の詩句に由来する。
- (66) 『申報』「自由談」の「謎話」欄は1916年11月13日から創設され, 13日, 16日, 17日, 20日の文章が署名「栩園」である。そのうち20日の謎話に鄭琴薫の「愛菊軒謎」が紹介され, その次に掲載された11月25日の「謎話」は鄭琴薫による投稿となっている。その後の二年間, 「謎話」欄は週に一回ぐらいの頻度で「自由談」に登場し, 読者投稿の数が多くなる。
- (67) 『申報』1918年10月11日, 第14面。
- (68) 「小説新報停刊啓事」『小説新報』第6巻12期, 1920年12月, 頁番号なし。
- (69) 北京の北平射虎社は1918年に解散し, その後同人らが隱秀社を成立させたが, 1922年に隱秀社も解散された。上海の萍社は1907年に成立し, 1921年に解散した。
- (70) 湯文潯輯『詩韻合璧』(1859年)と張玉書・陳廷散・李光地他奉勅撰『佩文韻府』(1704年)は両方とも清代の韻書(漢字を音韻によって分類する書物)である。
- (71) W生「謎之話」『東方雜誌』第22巻第8号, 1925年4月, 67-70頁。
- (72) 張燾『津門雜記』, 沈雲龍主編・近代中国史料叢刊第五十七輯, 565, 台北: 文海出版社, 1970年10月, 232頁。
- (73) 茸餘「詩謎」『申報』1935年8月13日, 第12面。
- (74) 楚聲「渭廬謎話」『錢業月報』第7巻第1-2期, 1927年2-3月, 186-88頁, 190-92頁。
- (75) 『申報』1928年4月5日, 5月4日, 5月19日(「自由談」の余白)に燈謎会の告知があり, 7月28日(第17面)に穹漢の「射虎余談」が載せられる。1929年から1930年にかけて謎話が時々『申報』「自由談」に載る。1929年10月10日(第18面)に思園「西冷謎話」, 11月10日(第17面)に養田「新世界射虎記」, 12月26日(第11面)に荆夢蝶「射虎小紀」, 1930年2月20日(第17面)に養田「射虎大会誌略」, 12月19日(第11面)に蔗根「滑稽謎語」, 12月29日(第13面)に薛韻柏「文虎小語」などがある。
- (76) 『文虎半月刊』の原本が入手できないため, 趙首成・邵濱軍主編『古今優秀燈謎鑑賞辭典』(桂林: 漓江出版社, 1991年6月), 789頁から引用。
- (77) 梁実秋「談謎」『緑州月刊』第1巻第2期, 1936年5月, 214-16頁。
- (78) 范煙橋「謎話小史」『衛星』第1巻第2期, 1937年2月, 49頁。
- (79) 周作人「謎語」, 松枝茂夫訳『周作人隨筆』富山房百科文庫, 1996年6月, 8頁。原文は周作人『自己的園地』晨報社叢書第11種, 北京: 晨報社, 1923年12月, 48-52頁。
- (80) 中国民俗学の開拓者の一人である。
- (81) 劉万章編「広州謎語」, 高伯瑜等編『中華謎書集成』第三冊, 1997年5月, 2529頁。
- (82) 陳光堯編『謎語研究』王雲五主編・百科小叢書, 上海: 商務印書館, 1930年12月, 2頁。
- (83) 「状物」とは, 主に物体や景色を描写する文章を指す。
- (84) 梁実秋「談謎」63-65頁。
- (85) 周作人「論八股文」, 同/止庵校訂『看雲集』周作人自選文集, 石家庄: 河北教育出版社, 2002年1月, 77頁。周作人「漢文学的傳統」同/止庵校訂『菴堂雜文』周作人自選文集, 石家庄: 河北教育出版社, 2002年1月, 10頁。周作人/楊楊校訂『中国新文学的源流』二十世紀国学叢書,

上海：華東師範大学出版社，1995年12月，33-34頁。

【付記】本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金（平成26年度，特別研究員DC2，課題番号26・9290，清末民国期における漢字文義謎の文化史的研究）によって行われたものである。

【附表】清末民国期の雑誌における謎話初出一覧（筆者が原文把握したもののみ）

初出年	篇名	作者	雑誌名	巻号
1889年	燈謎説	不明	益聞録	第901期
1904年	棟蓐室談虎	不明	新新小説	第1巻第3期
1908年	謎話巻一	古銘猷	国学萃編	第1期
1909年				第2, 4, 6-8期
1911年	簧冷軒謎話	心月	小説月報	第2年第10期
1913年	慧観室謎話	周効璘	庸言	第1巻第5, 6, 10期
	慧観室謎話（転載）		民国匯報	第1巻第3期
	邃漢斎謎話	薛鳳昌	小説月報	第4巻第1-3, 5-7, 9-10号 第5巻第1-12号
1914年	謎話	謝明新	学生雑誌	第1巻第6期
	邃漢斎謎話	薛鳳昌	小説月報	第6巻第1, 4-5号
	談虎偶録	徐枕亜	中華小説界	4月
1915年	談虎	蟄夫	江蘇省立第五中学校雑誌	第1期
	制謎叢話	慧因	文星雑誌	第1, 2期
1916年	留有余斎謎話	誥	清華週刊	第74, 77, 79期
	橐園春燈話	張起南	小説月報	第7巻第1-12号
1917年	別有会心室談虎	張惟一	小説新報	第2巻1-11期
				第2巻12期, 第3巻1-11期
1918年	芬陀利室隨筆	不明	小説月報	第3巻12期
				第9巻第2号
1919年				
1920年	春燈談虎録	窃九生	小説月報	第11巻第12号
1921年	弗措斎謎話	劉樽	鉄路協会会報	100期

	滴翠齋謎話	謝雲声	新声	第6期
	廢物謎話	王文濡	遊戯世界	第1期
1922年	謎話	廉	蘆墟	創刊号
1925年	謎之話	W生	東方雜誌	第22卷第8号
1926年	吳諺謎話	蔣吟秋	新月	第1卷第6期
1927年	龔弘説謎	(不明)	坦途	第4期
	渭廬謎話	楚聲	錢業月報	第7卷第1, 2期
1928年				
1929年	謎話：謎格	趙宗仁	学生文芸叢刊	第5刊第4期
	談謎	今勇齋	文芸月刊	第1期
1930年	謎学概論	施鵬翼	東北大学週刊	第86-88期 第89, 90期
	文虎話	紺珠室記者	墨海潮美術月刊	第2期
1931年				
1932年	謎話	笨	前驅	第58期
	謎屑	紅羊	万歳雜誌	第1卷第7期
	談虎	沈中路	珊瑚	第1卷第9期
	紙中廬謎話 (轉載)	亢聘臣		第1卷第1, 3, 5, 7, 9, 11期 第2卷第1, 4期
1933年	謎話	剪刀	十日談	第5期
	謎話	沈中路	珊瑚	第1卷第11期, 第2卷第2, 8, 9, 11期 第4卷第1期
1934年	蘆廬謎話	楊潔溪	協力月刊	第2卷第4-7期
	春燈溯源	楊汝泉	国聞週報	第11卷第9期
	春燈辨疑	楊汝泉		第11卷第13期
1935年	談人名謎	鹿萃	清華暑期週刊	第10卷第1期
1936年	如是我聞・打燈虎兒	關宗瓚	華語月刊	第56期
	談謎	実秋	緑洲月刊	第1卷第2期
	觚叢軒謎話	王壺隱	現象	第14, 15期

	不變色の談虎/輟耕談虎録（謝会心），季芳談虎録（不明），謎壇雜録（碧波），談虎百則（李笠僧），願無病慮謎話（胡緗青），我之謎生活（管雪齋），叙謎（鄔鴻軒）		文虎半月刊（湖北武昌）	
1937年	春燈談虎録	李鐘承	衛星	第1卷第2期
	謎話小史	範煙橋		
	謎話	阿倩	江南汽車旬刊	第68-71, 74, 75期
1938年	遺鴻樓譚/談虎（張東海），射餘録（放翁），文虎雜譚/談（海），文虎摭譚（祁仲書），含犀霏玉軒談虎（律西），見青山館謎話（周見公），一知半解室談謎（振），拾唾録（二王館主）		黒皮書	
1939年	秋燈夢憶	打虎将	立言画刊	第37期
	寄影車房謎話	鷓鴣		第45期
	文虎雜譚	祁仲書	五雲日昇樓	第1卷第4-11, 13-21期
	春雨軒談虎	行者		第1卷第8, 10-17, 19-20期
	春燈新話	舜年		第1卷第35-43期
1940年	春節話春謎	袁之	新民報半月刊	第2卷第4期
	談燈虎	趙征麟	公餘生活	第3卷第6期
	一十一草堂謎話	一士	立言画刊	第114期
完顏氏		第127, 130, 164期		
1941年	古謎叢談	趙璧如	五雲日昇樓	第2卷第12期
	古今謎話	張郁庭	北華月刊	第1卷第2-4, 6期, 第2卷第1, 2期
1942年	謎話（轉載）	古銘猷	芸林月刊	第116期
	一十一草堂謎話	完顏氏/一士	立言画刊	第180期, 第213期

1944 年	謎学	嘸虹	光化	第 1 卷第 2 期
	談文虎	匪因	古今半月刊	第 38 期
	燈謎餘談	応雅		第 54 期
1947 年	猥褻謎話	禹	公平報	第 1 卷第 11 期
		禹門	新上海	第 65 期
1948 年	説燈謎	朝春	宇宙文摘	第 2 卷第 1 期
	梅廬謎話	戈歌		
	燈謎小談	陳漢章	平漢路刊	第 38-42 期
	春燈隱語	知止居士	永安月刊	第 106 期
	拉雜談謎/謎話/謎談/談謎/謎語 (王寿富), 談虎説謎 (鐘靈), 文虎拾零 (周濁), 文虎談叢/文虎閑話 (心観)		虎会	